

PTSD をめぐる言説と、その苦しみと共に生きる人々

—インターネット上に綴られる苦悩の物語—

Discourse Analysis of People Living with PTSD

— Narratives of suffering expressed on Internet —

石川 舞 (Mai Ishikawa) 指導：辻内 琢也

序 論

PTSD (Post-Traumatic Stress Disorder ; 心的外傷後ストレス障害) の概念が作成されたことにより、人々は病者として作り上げられてしまっている可能性がある。しかし一方で、外傷的な経験をし、それによる苦しみを長期にわたって抱えながら生きている人々が多数存在するのは事実である。本研究では文献研究により、DSM (米国精神医学会診断・統計マニュアル) にPTSDが定義された社会的背景などを明らかにしつつ、現在、臨床現場やメディアなどで使われているPTSDを学問的立場、マクロな視点から概観した。その上で、実際にPTSDで苦しんでいる人々のインターネット上の語り注目することで、PTSDをミクロな視点から捉え、広くPTSDの全体像を捉えることを目的とした。

第1章 PTSDとその概念化

PTSDの定義、症状、治療法とともに、DSMにおけるPTSDの概念化を追った。DSMにおけるPTSDの概念化にはベトナム戦争が大きく関連しており、当時の社会的・政治的背景が大きく影響していたことが明らかになった。

第2章 PTSDをめぐる様々なモデル

心理学的モデル、医学・生理学的モデル、社会学・人類学的モデルの3方向からPTSDにアプローチすることで、PTSDを学問的立場、マクロな視点から捉えた。

心理学的モデルでは、現在における世界や自己に対する不適応な思考パターンが形成されるため、それらを合理的で適応的な思考パターンへ再構成することが重要とされている。医学・生理学的モデルでは、大きなストレスに遭遇すると、脳、ホルモンなどに長期的な影響を与える可能性がある。これらの影響は、遺伝を含めた個人の脆弱性に関連すると考えられるが、この脆弱性は個体の生存・種の保存にとっては有用であるというプラスの解釈も可能である。

社会学・人類学的モデルでは、心理学化される社会の中、PTSDという診断概念によって、戦争、難民などの問題に対し、すべてを心理学化・医療化という欧米の一元的な視点や解決方法に結びつけてしまいかねない傾向があることが明らかになった。

第3章 PTSDの実際

—インターネット上で“記憶”を語る人々—

インターネット上で語られる苦悩の物語に注目することで、PTSDをミクロな視点から捉えることを試みた。分析では2つのブログを、インタビュアーや研究者の手が全く介入していない「病いの語り」として捉えた上で、フランク (A, Frank, 1995) が提示する「病いの類型」つまり、回復の語り、混沌の語り、探求の語りを枠組みとして分析、解釈を行った。2つのブログから、長期に渡る語りの断片の積み重ねによって、ブログ全体が、ある1つの探求の物語の形を得ていることが明らかになった。探求の語りとは、病いの苦しみを受け入れ、身体の偶発性に翻弄される生のあり方に、新たな意味の探求の機会を生み出すような語りである。また、その探求の物語は、いつでも問題なく語られるとは言い切れず、症状の改善など、良い面がある一方で、様々な苦しみと共に、重層的に語られていた。

結 論

PTSD病者によるインターネット上の語りを分析するという本研究の特徴により以下の点が明らかになった。つまり、医療者や臨床現場に対する率直な思いや、混沌の語りでさえも堂々と語られること。抽象的、比喩的な表現を用いることで、言葉の概念を超えて存在する混沌の世界でさえも、伝達可能な形の語りに構成され得ること。また外傷的な経験自体が、混沌の語りそのものに含まれる可能性があり、すなわちPTSD病者は、混沌の語りを二重に含んだ物語を生きていること。インターネット上では自分の物語を受容してくれる聴き手をいつでも想定しながら、好きなだけ語りを吐き出す場を確保していること。さらにPTSD病者は、自らが苦悩を語ると同時に、自らが自身の変化における証人となることが示唆された。また、PTSD病者の語りは、それ自体が探求の物語となり、彼らは自分の人生の中にその苦悩を含ませることにより、自分なりのPTSDを構築しようとしていることが明らかにされた。

以上によりPTSDは、マクロな視点からでも、ミクロな視点からでも構成されるものであり、PTSD病者は、マクロな視点から見たPTSDを所持しながらも、その個人特有のPTSDの物語を生きていることが明らかにされた。